ちょっとそこまで ～お散歩日和（自然編）～

皆既月食

月の美しい季節になりました。加えて、１１月８日には、皆既月食という天体ショーも見られます。ということで、月についての話題を取り上げることにしました。

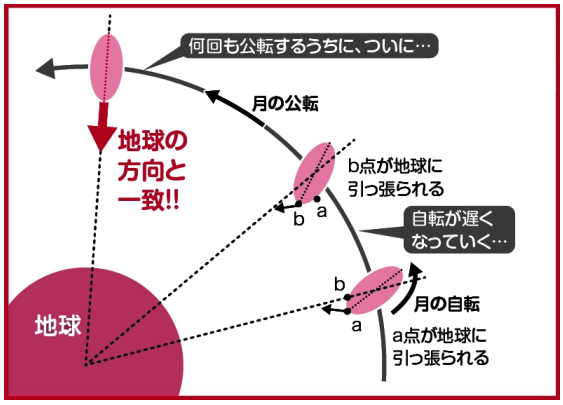
月と言えば、すぐに思い出す漢詩は、これでしょう。

静夜思（せいやし）　　李白（りはく）

牀前看月光　　牀前（しょうぜん）　月光を看（み）る
疑是地上霜　　疑うらくは　是（こ）れ　地上の霜かと
挙頭望山月　　頭（こうべ）を挙げて　山月を望み
低頭思故郷　　頭（こうべ）を低（た）れて　故郷を思う

（意味）
寝床に差し込む月の光があまりに明るくて、まるで地上に霜が降りたのかと思ったほどだ。
顔を挙げて山にかかる月を眺めていると、故郷への思いが募り、自然と首が垂れてきてしまう。

李白３１歳の時の作だそうです。２５歳で故郷を出て方々を放浪する中で、月光が冴え、地上が白く輝いて見える夜に、ふと遠い故郷のことを偲び、郷愁に耽っている様子を詠っています。それが、自身の境涯を投影しているように感じた人が多かったのでしょう。誰もが知る名作として永遠の輝きを放っています。



私事で言えば、郷里を出て５０年の歳月を経て尚、残念ながら、いまだにふるさとを懐かしく思うことが少なく、少々申し訳なさが先行する詩でもあります。

さて、月が常に同じ面を地球に向けている、つまり、月が地球の周りを１回まわる間に、それと同じ向きに月自身も１回自転していることは広く知られていることです。

しかし、何故かと問われると、なかなか答えに窮します。一般的には、地球の重力の影響を受け、まるで左右に揺れていたブランコが次第に揺れが小さくなって止まってしまうかのように、自然と現在の姿に落ち着いたということになります。

そこで出てきたのが、月の模様を巡っての伝説です。日本では昔から月にはウサギが住んでいるとされてきました。平安後期に書かれたとされる「今昔物語」では次のような説話が伝えられています。

猿、狐、兎の３匹が、力尽きて倒れている老人に出逢った。
３匹は老人を助けようと考えた。そこで、猿は木の実を集め、狐は川から魚を捕り、それぞれ老人に食料として与えた。
しかし、兎だけはどんなに苦労しても何も採ってくることができなかった。自分の非力さを嘆いた兎は、何とか老人を助けたいと考えた挙句、猿と狐に頼んで火を焚いてもらい、自らの身を食料として捧げるべく、火の中へ飛び込んだ。

その様子を見た老人は帝釈天の姿となって現れ、兎の捨て身の慈悲行を後世まで伝えるため、兎を月へと昇らせた。月の兎の姿の周囲に見える煙状の影は、兎が自らの身を焼いた際の煙だと言う。

ちなみに、中国ではこの兎を玉兎と言い、お餅ではなく、不老不死の薬を作っていることになっています。ということで、世界の国や地方にはどんな説があるのか、見てみましょう。

日本　ウサギ

女性の横顔

カナダインディアン　バケツを運ぶ少女

バイキング　水を担ぐ男女

北欧　本を読むお婆さん

アラビア　吠えるライオン

南欧　蟹のはさみ

ドイツ　薪を担ぐ男

実に愉快であり、こういうのを多様性というのではしょうね。

ひょっとして興味があるという方がいらっしゃるかもと思うので、蛇足までに触れておきます。

月が地球に対しほぼ同じ面（表側）を向けていることは先に触れましたが、厳密に言えば、地球から見た月は天秤が動くようにゆっくりと揺れ動いています。これを「月の秤動（ひょうどう）」と言います。英語では「libration」と言い、ラテン語の天秤（libra）に由来します。

現在はＣＧ技術がとても進歩しているので、そのシミュレーション動画を次のサイトで見ることができます。「目からウロコ」のような映像ですから、お勧めです。一度閲覧してみてください。

https://www.youtube.com/watch?v=N1SvZM4aYhQ

ついでに、満ち欠けを観たい場合は、こちらをどうぞ。

https://www.youtube.com/watch?v=3f_21N3wcX8

（終）